

田舎自慢

軽快な医局日誌や学会報告で医局日誌がにぎわっていてなによりだ。外勤にいくと医局日誌を楽しみにしていると外の先生にもいわれるし、H 島先生は新幹線の中で読んでいて声をだしてげらげら笑ってしまっただけで恥ずかしかったとおっしゃっていた。E 本先生がこのまま連載を続けてくれるなら購読に課金して医局費の足しにしてもいいかもしれない。私にはどうも軽やかな文章を書く才能がないので枯れ木も花の賑わいで自分流に寄稿したい。

三月初めの週末、実家に帰省した。毎年この時期に「藍のまち羽生さわやかマラソン」というハーフマラソンのレースがあるのでそれを口実に実家に帰省している。羽生といっても羽生結弦君とは関係なくて、埼玉北部の群馬・茨城県境にある小さな町だ。私は大宮で生まれ羽生で育った。福島の人とは当然として埼玉県人でもその地名を知らない人がいるくらい無名のまちだ。利根川の川魚が泳いでいて鄙びたよい水族館があるが、何かに頭にきた従業員が水槽に毒を盛って魚がみな死んでしまった。これはまずいと思ったのか、市はゆるキャラの開発で勝負しようと思ったらしく、世界キャラクターサミットを開催してゆるキャラ最多集合数でギネス記録を達成したらしい。でも本当はそんな大きなイベントが似合う場所ではなくて、羽生市民は田舎であることを開き直って誇るべきだと思う。実はそれを裏付ける文芸作品が2つある。

一つ目はつげ義春の「枯野の宿」だ。つげといえば知る人ぞ知るガロ系の漫画家で「ねじ式」などで独自のシュールな世界を展開している。「枯野の宿」も名作の一つだと思うが、これは漫画家の主人公が羽生なら家を建てて家賃を払わない生活ができるだろうと200万円の予算で不動産屋に赴くが追い返される。仕方なく近くの安宿に泊ったら高熱にうなされて枯野を駆け巡る夢を見るという漫画作品だ。少年時代に利根川べりのすすき野原でイナゴをとって遊んだ身としては（注：そのイナゴは佃煮にして食べる）、この作品を読むと故郷が音やにおいのレベルからよみがえってくる。つげを知らない若い方は一度手にとっていただきたい。羽生は残念ながら登場しないがつげの文章家としての面目躍如なのが随筆「貧乏旅行記」だ（埼玉の田舎である寄居や秩父は登場する）。これは関東・東北を中心に地味でさびれた場所を作者が巡った紀行文で、この随筆に影響されて貧乏旅行をよくしたものだ。旅や鄙びた温泉が好きな方、つげが好きな方でこの希代の紀行文をまだ読んでいない方には一読をお勧めする。（なおちくま文庫のつげ義春コレクションにおさめられている「苦節十年記・旅籠の思い出」には羽生が登場する）

二作目は田山花袋の「田舎教師」だ。花袋は自然主義の流派に属する明治・大正を生きた作家で、田舎教師は彼の代表作だ。貧乏のために夢かなわず、羽生の弥勒という土地の教師として埋もれた人生を余儀なくされた青年をリアリズム豊かに描いた小説だ。まじめな青年なのに、渡良瀬川対岸の中田遊郭（現在の茨城県古河市）に通い始め、借金は膨れ上がり、挙げ句に入れ上げた女は身受けされていなくなってしまう。主人公は貧乏なので人力車には乗

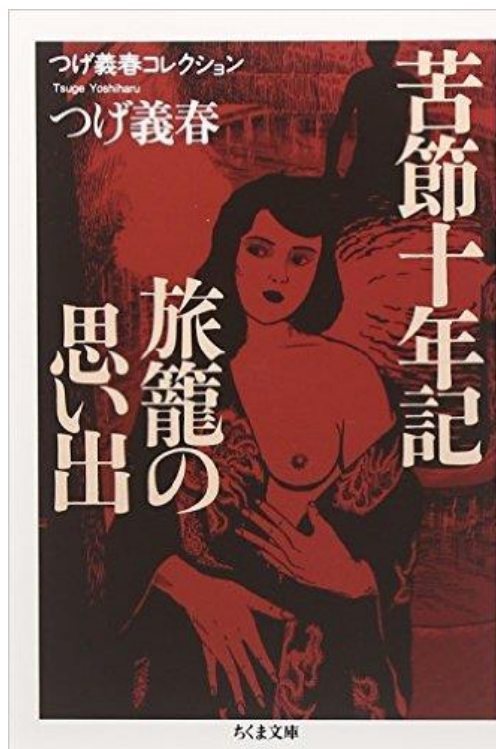
れずこの土地をてくてく歩くのだが、出てくる細かい地名の一つ一つが私にとって身近で友人が住んでいたり商売していたりする。学校の先生が足しげくこの狭い田舎で悪所通いをしていたらすぐ人目について噂されるだろうと読んでいて本当にはらはらしてしまう。この小説には小林清三という実在のモデルがいて今も羽生の建福寺に墓があるが、残念ながら（たぶん）小生のご先祖様ではない。「田舎教師最中」と「花袋せんべい」は福島の薄皮饅頭や柚餅子に相当する羽生の土産品である（シン・医局長殿、今度帰省したら買ってきます）。

くだんのハーフマラソンは花粉症で粘膜が充血した上に風邪で咳が止まらず、おまけに走っていたらシューズのかかとがとれてしまい最悪の条件だった。にもかかわらず何故か例年より好タイムで走り終えた。その上、三週間続いた咳が走った後ぴたりと止まった。やはり田舎の空気は素晴らしい。「枯野の宿」や「田舎教師」に描かれた通りの何もない田園地帯を走り抜ける喜びは地元鼯もあつかもかもしれないがどこか本物の田舎感があるように思う。主催者が「さわやかマラソン」と冠して「田舎教師マラソン」としないのは主催者の田舎コンプレックスのせいだと思うが、羽生の空気がさわやかなことは走ればわかる。もし拙文の読者がランナーであれば田舎を堪能できるフラットな高速コースとしておすすめしたい。

小林



はにゅきゃら



つげ義春
蟻地獄
枯野の宿

新潮文庫
の
新刊
貸本時代の
つげ作品には、
懐かしい時代が
響いている。



Yonda?

